

論 文

看護学生の社会的スキル －生活感情との関連に焦点をあてて－

北村 昌美・福塚 貴世・河村 一海^{*1}
高荷 恵美子^{*2}・山口 恵子^{*3}・稻垣 美智子^{*1}
金沢医科大学附属看護専門学校 ^{*1}金沢大学医学部保健学科
^{*2}小松市民病院 ^{*3}石川県立総合看護専門学校

Social skills of nursing students in relation to their attitudes to life

Masami Kitamura, Takayo Hukutuka, Kazumi Kawamura^{*1}
Emiko Takani^{*2}, Keiko Yamaguchi^{*3} and Michiko Inagaki^{*1}

Kanazawa Medical University Nursing School

^{*1}School of Health Sciences, Faculty of Medicine, Kanazawa University

^{*2}Komatsu Municipal Hospital

^{*3}Ishikawa Prefectural School of Nursing and Public Health Nurses

要 旨

本研究は、看護学生が学校での学習体験を重ねることにより社会的スキルがどのように変化していくのか、また看護学生の生活感情が社会的スキルにどのような影響があるかを明らかにすることを目的として行った。

調査対象者は、石川県内の3年課程のK看護専門学校生172名で、質問紙調査を学年ごとに集団場面で実施した。

その結果、以下の結論を得た。

1. 社会的スキルにおいて社会的感受性は、3年生が他学年より有意に高かった。
2. 生活感情において理想目標の感情は、学年が進むにつれて低下する傾向にあった。
3. 社会的スキルのうち情緒的表現性・社会的表現性・社会的コントロールは生活感情の影響が大きく、情緒的コントロールは影響が少なかった。

以上から自己を表現する能力や話し合いで社会的役割を演ずる能力の教育には、その学生の生活に対する感情への教育的配慮をもった方法が必要であることが示唆された。

キーワード

社会的スキル、生活感情、看護学生

はじめに

人間は青年期において親、教師に加えて友人関

係を通して生産的活動のための他人との共同のあり方を体験していく。そして看護学校において臨

地実習の場で患者、看護スタッフなどとの対人関係を体験する。しかし、人間関係が希薄な社会に育つ現代の学生はこの臨地実習での対人関係を円滑に運ぶことが困難なことが多い。看護は対人関係を基盤として行われるものであり、看護基礎教育における対人関係能力の育成は重要な課題である。

これまでの対人関係に関する研究報告としては、千葉ら¹⁾が社会的スキル訓練を授業に取り入れた結果について報告している。これはスキル行動そのものに焦点をあてたもので、社会的スキルを高めることにより自分に自信を持つことができ精神的健康を保つことができると述べている。一方、布佐ら²⁾は看護大学生の社会的スキルと生活体験の関係について、新たな人との関わりの中で自信を得る体験と自信を失う体験の両方を経験することが社会的スキルを高める要因であると述べている。つまり、青年期にある看護学生の社会的スキルの獲得には、自信があるといった肯定感情と自信喪失などの否定感情が関連していると思われる。

これまでの対人関係に関する研究で用いられた社会的スキル尺度は、スキル行動そのものを測定することを目的としていた。本研究は、コミュニケーション過程の観点から社会的スキルを捉えた尺度を用いた。これは対人関係における有効なコミュニケーション行動を生み出す認知能力を測定することにより下位尺度のどこに問題があるかを明確にでき、具体的な分析が可能になると考えた。

今回は看護学校における3年間の社会的スキルがどのように変化していくのか実態を知るとともに、看護学生の生活に対する感情が社会的スキルにどのような影響があるかを明らかにすることを

目的として研究に取り組んだ。

用語の定義

1) 社会的スキルの定義についてはリッギオの定義を用いた。これは対人関係における情報のやりとりの過程の中に社会的スキルを位置づけ、コミュニケーションの観点から研究の枠組みを考えているものである。この枠組みは情報の伝達、情報の解読、情報の管理・制御という3つから構成され、その情報はさらに非言語的情報と言語的情報との2つに分けられ合計6つの基本的な社会的スキルを構成している³⁾。リッギオはその個人差を測定する自己報告尺度SSSI (Social Skills Inventory) を作製している。

2) 生活感情を内田⁴⁾は「比較的弱いが、持続的で偏在的な気分感情で生活全体から生ずるものであり、肯定的感情と否定的感情とがある」と定義している。そして、この青年の生活感情を人に関わるもの、時間的展望に関わるもの、情操の3種類に分け、それらを具体的概念として4領域に分類しており(表1), 本研究ではこれを引用した。

研究方法

1. 対象

石川県内にある3年課程のK看護専門学校生で、1年生62名(うち男性2名), 2年生59名(うち男性1名), 3年生51名(うち男性1名)の合計172名である。

なおK看護専門学校のカリキュラムで対人関係に直接関係すると思われる心理学、基礎看護技術のコミュニケーション技術、人間関係論の講義は

表1 青年の生活感情の分類⁴⁾

次元	領域	概念
人の次元	対人関係の領域	日常生活の中で他者に向けられる、あるいは他者との関係の中で生じる感情。 親和的・協調的な肯定的感情と、うまく果たせない状態で感じる否定的感情とがある。
	自己認知の領域	日常生活の中で自己に向けられる、あるいは自己に感じられる感情。 自己拡大的・自己受容的な肯定的感情と、自己を拒絶する否定的感情とがある。
時間的展望の次元	現実目標の領域	日々の生活における現実目標の達成に関わる感情。 達成すべき目標の存在や達成途上、達成後に感じる肯定的感情と、目標の不在や喪失による否定的感情とがある。
	理想目標の領域	将来の理想目標達成に関わる感情あるいは将来展望により生じる感情。 自己の生き方に希望をもち理想を追求しようとする肯定的感情と、理想や自信不在の否定的感情とがある。
情操の次元	情操の領域	価値あるものへの感情で肯定的感情のみである。

4) 内田(1990)に基づき、引用者が作成

1年次に終了する。また、本格的に臨地実習が開始される時期は2年次10月からである。

調査内容については本研究以外には使用しないことを保証した上で、協力が得られた学生に実施した。

2. 調査期間

平成13年5月11日から5月24日。

3. 調査方法

質問紙調査を学年ごとに集団場面で実施した。研究者が直接その場で研究の趣旨と内容及び方法について説明した。

4. 調査内容

1) 社会的スキル

樋野⁵⁾の日本語版SSI (Social Skills Inventory) で90項目からなる。これは情緒的表現性、情緒的感受性、情緒的コントロール、社会的表現性、社会的感受性、社会的コントロールの6要素で構成されている。

個々の項目に記述されたそれぞれの事柄がどの程度日常とっている行動と当てはまるかを5段階評定で回答を得た。採点方法は「非常に当てはまる」を5点、「非常に当てはまらない」を1点として、6つの下位尺度それぞれについて合計点を算出した。ただし、逆転項目に関しては「非常に当てはまらない」を5点、「非常に当てはまる」を1点として加算した。得点範囲は最高点75点から最低点15点である。

2) 生活感情

内田⁴⁾の生活感情尺度を用いた。これは対人関係、自己認知、現実目標、理想目標の4領域で構成され、32項目からなる。

回答方法は「非常に当てはまる」から「非常に当てはまらない」までの5段階評定で、生活感情

の肯定的な傾向ほど高得点になるように配点されており、得点範囲は8点から40点である。

5. 分析方法

1) 社会的スキルと生活感情得点の平均点は一元配置分散分析及び多重比較検定により分析した。

2) 得点結果の正規性を確認したうえで社会的スキルの平均点+1SDを高得点群、平均点-1SDを低得点群とした。そして各社会的スキルの高得点群、低得点群の生活感情得点は母分散が等分散ではなかったため、社会的スキルと生活感情の関係はウェルチのt検定を用いた。

統計処理はエクセル統計statcel4.0を用いた。

結 果

有効回答数は、170名（有効回答率98%）であった。

1. 社会的スキルの平均点（表2）

各学年の社会的スキルの平均点のうち社会的感受性は1年生55.3±5.7点、2年生55.2±7.5点、3年生57.9±5.6点であった。これらの多重比較検定の結果、3年生と2年生（p<0.025）、3年生と1年生（p<0.028）の得点間に有意差を認めた。

有意差はなかったが情緒的表現性は学年が進むにつれて得点が高くなっている。また、情緒的コントロールについては1年次が最も高く1年次から2年次に得点が低くなっている。

2. 生活感情の平均点（表3）

各学年の生活感情の平均点のうち理想目標は1年生30.4±5.5点、2年生27.9±6.7点、3年生25.8±6.3点であった。これらの多重比較検定の結果、3年生と1年生（p<0.0001）、2年生と1年生（p<0.027）の得点間に有意差を認めた。

表2 社会的スキルの平均点（m±SD）

社会的スキル	1年生 (N=62)	2年生 (N=57)	3年生 (N=51)	全 体
情緒的表現性	45.0±7.0	46.2±8.9	47.1±7.2	46.0±7.7
情緒的感受性	44.5±6.6	46.1±7.0	45.2±6.9	45.2±6.8
情緒的コントロール	43.4±8.4	40.5±9.0	41.5±8.6	41.8±8.7
社会的表現性	46.5±9.0	46.4±10.2	45.7±8.5	46.2±9.1
社会的感受性	55.3±5.7	55.2±7.5	57.9±5.6	56.1±6.4
社会的コントロール	45.8±7.2	45.4±7.7	45.8±7.1	45.6±7.3

* p < 0.05

表3 生活感情の平均点 (m±SD)

生活感情	1年生 (N=62)	2年生 (N=57)	3年生 (N=51)	全 体
対人関係	30.7±5.4	29.8±5.5	29.3±5.7	30.0±5.5
自己認知	21.1±5.3	19.7±5.5	19.3±5.4	20.1±5.4
現実目標	25.7±6.3	24.4±6.6	24.6±7.0	24.9±6.6
理想目標	30.4±5.5	27.9±6.7	25.8±6.3	28.2±6.4

**

*

* p < 0.05 ** p < 0.01

表4 社会的スキルと生活感情との関連

		生活感情 (m±SD)							
		対人関係		自己認知		現実目標		理想目標	
社会的 スキル	情緒的表現性 46.0±7.7	高得点群 (n=29)	32.4±4.4	**	22.7±6.0	**	27.9±7.6	**	31.3±6.7
		低得点群 (n=30)	27.7±7.3		18.1±5.2		22.8±5.3		26.6±6.4
社会的 スキル	情緒的感受性 45.2±6.8	高得点群 (n=29)	32.1±5.2	*	21.9±6.0	**	27.5±6.0	**	30.2±6.6
		低得点群 (n=24)	28.1±7.1		19.4±6.2		23.8±7.2		26.9±6.8
社会的 スキル	情緒的コントロール 41.8±8.7	高得点群 (n=27)	28.4±7.8		21.0±6.5		24.3±7.3		28.8±6.9
		低得点群 (n=23)	30.5±5.3		20.8±7.2		24.4±8.4		28.6±8.1
社会的 スキル	社会的表現性 46.2±9.1	高得点群 (n=28)	34.3±4.1	**	23.8±4.6	**	28.5±6.9	**	32.7±5.5
		低得点群 (n=32)	27.9±5.8		18.4±5.3		21.3±5.8		24.8±5.9
社会的 スキル	社会的感受性 56.1±6.4	高得点群 (n=25)	30.4±5.7		17.9±4.8	**	25.1±7.9		28.7±5.9
		低得点群 (n=27)	28.9±5.3		21.1±3.9		26.0±5.4		29.0±5.2
社会的 スキル	社会的コントロール 45.6±7.3	高得点群 (n=28)	31.8±4.6	**	21.8±5.9	**	27.1±7.4	**	31.3±6.2
		低得点群 (n=29)	27.3±6.1		17.2±4.4		20.8±6.0		24.6±6.6

* p < 0.05 ** p < 0.01

対人関係、自己認知、現実目標の領域においては有意差を認めなかったが、理想目標と同様に1年次が最も高い得点で、2年次に低くなっていた。

3. 社会的スキルと生活感情との関連 (表4)

情緒的表現性、社会的表現性、社会的コントロールの高得点群は全ての領域の生活感情が低得点群より有意に高かった。

情緒的感受性では、対人関係の領域のみ高得点群は低得点群より生活感情が有意に高かった。

また、社会的感受性では、高得点群は低得点群より自己認知の領域で生活感情得点が有意に低いという結果であった。

考 察

今回の結果において看護学生の社会的スキル得点のうち、社会的感受性の得点は3年生が他学年

と比較して有意に高かった。この得点の高い人は他者に対して注意を払いしかも社会的規範の知識を多く持っているために、自分自身や他者の行動の適切さに強く関心を持つと言われている⁵⁾。

今回の調査は5月に実施しており、1、2年生はまだ本格的な臨地実習を体験していない。3年生は臨地実習を通して様々な人とかかわった経験から、他学年に比べ他者に対して注意を払う機会が多くなったと考えられ、臨地実習での体験が社会的感受性を高める要因の一つになるのではないかと示唆される。

対人関係能力に関係すると考えられる授業は1年次に集中しているが、1年生と2年生間で有意な差は認められなかった。

また、樋野⁵⁾の研究報告によれば大学生の社会的スキル尺度得点は、情緒的表現性46.4±7.5点、

情緒的感受性45.1±7.1点、情緒的コントロール42.2±9.1点、社会的表現性44.7±9.8点、社会的感受性55.4±8.1点、社会的コントロール45.3±8.3点であった。大学生と看護学生の平均点を比較すると、看護学生は社会的表現性と社会的感受性は得点が高く、他はほぼ同様の値を示した。

生活感情のうち理想目標の得点は1年生が他学年に比べ有意に高かった。3年生は臨地実習での体験や就職活動などにより将来が1年生より具体的で現実的である。内田⁴⁾は「理想目標の感情は将来が比較的具体的で現実的である場合には消極的になる」と述べており、これは今回の結果と一致している。

また内田⁴⁾の研究報告では、一般大学生の生活感情尺度得点は、対人関係28.8±4.6点、自己認知23.9±5.0点、現実目標26.3±5.7点、理想目標27.5±5.0点で、看護学生のほうが自己認知の領域が低い傾向にあった。今回の調査は1施設の看護学生を対象としており、この結果が看護学生全体の傾向といえるかは判断できないが、今後自己認知を低下させる要因について検討が必要であると考える。

情緒的表現性、社会的表現性、社会的コントロールの高得点群は、全ての生活感情の得点が高いという結果であった。つまりコミュニケーション過程において主張性や非言語表出性の能力と様々な社会的役割を演じる能力が發揮されるか否かはそのときの気分感情の影響を受けているものと考えられる。

以上のことから、自己を表現する能力や話し合いなどで社会的役割を演ずる能力の教育には、その学生の生活に対する感情への教育的配慮をもった方法が必要であることが示唆された。

今回の研究では、看護学校におけるカリキュラムの内容との関連については検討できなかった。またどのような要因で社会的スキルの得点が低い、またはバランスが悪くなるかは明確にできなかった。今後の課題であると考える。

結論

1. 社会的スキルにおいて、社会的感受性は3年生が他学年より有意に高かった。
2. 生活感情において、理想目標の感情は学年が進むにつれて低下する傾向にあった。
3. 社会的スキルのうち情緒的表現性・社会的表現性・社会的コントロールは生活感情の影響が大きく、情緒的コントロールは影響が少なかった。

付記

本研究は、平成9～11年度石川看護研究会研究活動推進事業、看護教育部会において助成を受けたものである。

文献

- 1) 千葉京子、他：基礎看護学教育における社会的スキル訓練、第19回日本看護科学学会学術集会講演集、300-301、1999
- 2) 布佐真理子、他：看護大学生の社会的スキル－1年間の生活体験と自己効力感との関連に焦点を当てて－、日本看護学教育学会誌、9(2), 118, 1999
- 3) 菊地章夫、他：社会的スキルの心理学、川島書店、192-196, 1994
- 4) 内田圭子：青年の生活感情に関する一研究、教育心理学研究、38(2), 12-13, 16, 18, 1990
- 5) 横野潤：社会的技能研究の統合的アプローチ(1)-SSIの信頼性と妥当性の検討-、関西大学大学院『人間科学』31, 4, 7-12, 1988